

病害虫発生予報 第7号(10月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
トマト・ミニトマト	黄化葉巻病	やや多	野菜・花き全般	シロイチモジヨトウ ハスモンヨトウ オオタバコガ ミナミキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ	並
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病 つる枯細菌病	並 並 並			やや多 並 やや多 並
アブラナ科野菜	コナガ	並			並
野菜・花き全般	アブラムシ類 ハダニ類	やや少 並	カンキツ	ミカンハダニ	やや少
			果樹全般	カメムシ類	県北・中部：並 県南部：やや少

気象予報

1か月予報（予報期間 9月24日～10月23日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >

【気温】 近畿地方



【降水量】 近畿地方



【日照時間】 近畿地方



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

10月	月平均気温（平年値） （℃）		月降水量（平年値） （mm）	
	和歌山	18.8	和歌山	122
潮岬	19.8	潮岬	244	

I . 野菜・花き

<トマト、ミニトマト>

1. 黄化葉巻病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培ミニトマトにおける9月下旬の発生ほ場率は25%（平年4%）、発病株率は0.9%（過去7年の平均0.4%）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 定期的な薬剤散布により感染適期である本ほ初期のタバココナジラミ防除を徹底する。
- ② 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
- ③ 家庭菜園を含む露地栽培トマトおよびミニトマトについては、栽培終了後は速やかに全株を引き抜き、野積みにした上に古ビニルなどで2週間以上覆ってコナジラミ類を死滅させる。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② 10月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 抑制栽培では、開花期ごろからの発生に注意する。
- ② 多湿ほ場で発生しやすいので、排水を良くする。
- ③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② 10月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 開花期から発生する。発生初期より防除を行う。
- ② 乾燥条件が続くと発生が多くなる。

3. つる枯細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② 10月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は、褐斑病、褐紋病と葉の病斑が似ているので注意する。褐斑病、褐紋病が日光に透かしても不透明であるのに対し、本病は光が透けて見えることで区別できる。
- ② 防風ネットの発病抑制効果は高い。
- ③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

<アブラナ科野菜>

1. コナガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0.2頭）、和歌山市2頭（過去5年の平均7.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- ② 収穫後に作物残さを放置するとそこが発生源になり、周辺のほ場に成虫が分散して発生が多くなるので、収穫後は速やかに残さをすき込む。

<野菜・花き全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率20%、生息葉率1.8%）、ワタアブラムシの発生ほ場率は13%（平年26%）、生息葉率は1.0%（平年5.6%）であった。
- ② 黄色水盤（紀の川市）への9月1～20日の飛来数は、21頭（平年99.6頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① シルバーマルチは有翅虫の飛来防止効果がある。
- ② ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシが発生している地域があるので注意する。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は25%（平年21%）、生息葉率は8.0%（平年4.3%）、ナミハダニの発生ほ場率は13%（平年17%）、生息葉率は1.5%（平年2.5%）であった。
- ② 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬のハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）の発生ほ場率は47%（平年23%）、生息株率は17.3%（平年10.6%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① キクに発生したナミハダニが移動するので、キク栽培ほ場に近いほ場では特に発生に注意する。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は13%（平年25%）、生息株率は2.0%（平年4.6%）であった。
- ② フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市24頭（平年18.0頭）、御坊市104頭（平年35.1頭）、印南町3頭（平年49.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢幼虫に対する防除効果は低いので、ふ化幼虫の集団が分散するまでの若齢幼虫期に防除するよう努める。

- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

4. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は13%（平成30%）、生息葉率は1.0%（平成2.5%）であった。
- ② 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は33%（平成32%）、生息株率は6.0%（平成4.8%）であった。
- ③ フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市777頭（平成276.7頭）、和歌山市2,209頭（過去5年の平均917.4頭）、御坊市1,156頭（平成707.5頭）、印南町945頭（平成240.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① シロイチモジヨトウに準ずる。

5. オオタバコガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は13%（平成19%）、生息株率は2.7%（平成3.6%）であった。
- ② フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市6頭（平成11.2頭）、御坊市3頭（平成5.0頭）、印南町0頭（平成6.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 中・老齢幼虫に対する防除効果は低いので、若齢幼虫期に防除するよう努める。

6. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は100%（平成54%）、生息葉率は30.5%（平成20.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また、防虫ネットを被覆して成虫の飛び込みを防ぐ。

7. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率3%、生息葉率0.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① イチゴではミツバチの導入前に徹底防除を行う。

II. 果 樹

<カンキツ>

1. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部における9月中旬の発生園率は7%

